

第7章

和辻哲郎『風土』成立の時空と欧州航路

——歴史的偶然と地理的必然との交差において 稲賀繁美

和辻哲郎（一八八九—一九六〇）の洋行（一九二七—二八年）は、代表作『風土——人間学的考察』（岩波書店、一九三五年）を生んだ。欧州航路による船旅はその成立にどのように関わっていたのだろうか。それを歴史的な時間軸と地理的な空間の広がりとの関数で検討することが本章のめくろみとなる。それは、マルティン・ハイデガー（一八八九—一九七六）の『存在と時間』（一九二七年）の和辻による読解がどのようにして「風土性」の概念と切り結んでいたかを、作品成立の時間性と空間の風土性との関わりで実存的に分析する営みともなる。いわば『風土』に至る和辻の思索そのものを、時間性（Zeitlichkeit）と空間性（Raumlichkeit）のうちに露呈（ex-streue）させてみる試みである。実存の偶然性を契機として、気候生態系による必然をいわゆる自然環境決定論の軛から解放しようとする——そうした和辻の意図が、そのためにかえって抱え込むほかなかった拘束。その桎梏が「国民道徳」の「風土性」としてあぶり出されてくるはずである。

1 「洋行」の濫觴と変質

手順として、まず、和辻の「洋行」に六十年以上先行する、二つの引用から始めたい。一八六七年（慶応三

スエズ運河開削工事を目の当たりにした渋沢栄一の観察は、運輸と貿易の利潤に目を向けている。これに対して福沢諭吉は、洋行の航路がことごとくイギリスによって支配され、軍事的な制海権がその運用を支えている現実に注目している。どちらも極東のどん詰まりの日本列島から西航した。西回りの欧州航路では、イギリスによる世界支配の周辺から中枢へと徐々に接近する道筋をたどることになる。旅程が進むにつれて、大英帝国の威光がいやましに増幅される。これは太平洋を渡って、北アメリカ西海岸に上陸した咸臨丸（福沢も下役で同行）や『米欧回覧実記』（博聞社、一八七八年）に結実する岩倉遣欧使節の場合とは、きわめて対照的な経験を約束した。実際、大英帝国の首都ロンドン經由で地中海を横切り、アラビア海、インド洋と東航すれば、その先のシンガポールなどは、すでに植民地の場末、末端の出先にすぎない。多くの日本人旅行者は、帰路、シンガポールに到着すると、これようやくアジアに戻ってきたという安堵を抱くことが一般であった³³。

一九〇〇年（明治三十三年）には、官命によって二年間のロンドン留学途上に西航する夏目漱石（一八六七—一九一六）が、八年にわたる欧米滞在から帰国途上の南方熊楠（一八六七—一九四一）と、互いにそうとは知らぬまま、インド洋上ですれ違っている。二人のロンドン体験を隔てる違いは、年齢差や、官費留学と私費放浪との対比に加えて、たどった経路の違いによっても、ある程度条件づけられていたとは言えないだろうか。一八八六年に満十八歳で北米に渡った熊楠は、フロリダ經由・キューバからの大西洋横断でロンドンに乗り込んだ。道中、チャリネー曲馬団に通訳がてら随行して西インド諸島見聞の経験をも積んだこの植物学者は、ロンドンでも気後れなく、意気軒昂にあたりはばかりず行動した。確かに大英博物館で奇矯な振る舞いを見せて話題をまいた熊楠にも、いささか神経過敏な奇人の趣はある。とはいえ、その我が物顔ぶりは、神経衰弱が嵩じて、ロンドン滞在中、ほとんど下宿に引き籠りの生活を営んだ漱石とは好対照といってよい。文部省第一回給費留学生として三十四歳で英文学研究を命じられた未来の小説家は、到着翌日からボーア戦争戦勝式典に巻き込まれて動転し、ショーウィンドーの鏡に映った醜態で貧弱な東洋人がほかならぬ自分と気づいては、意気沮喪する。こうした漱石の劣性コンプレックスは、過度の使命感や、世紀末ロンドンという目的地の重圧によるものとして説明されること

が多かった。だが不適応症候が船旅の初期から発症していたことは、高浜虚子宛ての船中からの書簡にもうかがえる。「唐人と洋食と西洋の風呂と西洋の便所にて窮屈千万一向面白からず。早く茶漬と蕎麦が食度候」（香港発）。欧米の慣習への違和感、人間嫌いの疎外感が高進した背景にも、プロイセン号というドイツ船籍の旅客船で経験した西回り航路の刷り込みが作用していたのではなかっただろうか。

2 「洋行不要論」の先駆としての和辻哲郎

和辻哲郎の「洋行」は福沢の欧州航路体験から六十五年後、渋沢の「航西日誌」に遅れること六十年。さらに熊楠や漱石のロンドン体験からも四半世紀を隔した時期の「洋行」だった。日本郵船の白山丸（一九二三年就航、一万三百八十トン）による船旅であり、マルセイユに到着するまでの船上は日本の延長、寄港地での物見遊山も定番・お決まりのコースを踏襲している。一九二〇年代は第一次世界大戦の終了とともに、地中海やインド洋の航行が安全となり、裕福な階層の洋行が流行をみせた時代だった。シンガポールやスエズ運河に寄港する日本人たちの紀行文からも、もはや渋沢栄一のような国家事業への関心、あるいは福沢諭吉のような大英帝国の軍事支配への注目は、表立って見られなくなる。だが、日本では二三年（大正十二年）に関東大震災、二九年（昭和四年）には世界大恐慌が発生し、その間の不況の谷間には日本企業の海外進出とともに、南米移民の拡大も模索されていた。さらに世界恐慌に続く三〇年代半ば（昭和十年代）に入ると、世界情勢は急速に緊迫の度合いを深め、中国大陸への日本の侵出が国際的な軋轢を増すとともに、国内では、あらためて欧州航路の要所を押さえる大英帝国や、太平洋への影響力を強めるアメリカに対抗する国家主義的言説が耳目を引くようになっていく。

こうしてみると、和辻の洋行は、両大戦間のつかの間の平和が比較的のんびりとした外遊を許した最後の時期にあたっていたことが見えてくる。当時、和辻は京都帝国大学の助教授であり、すでに日本国内では『古寺巡

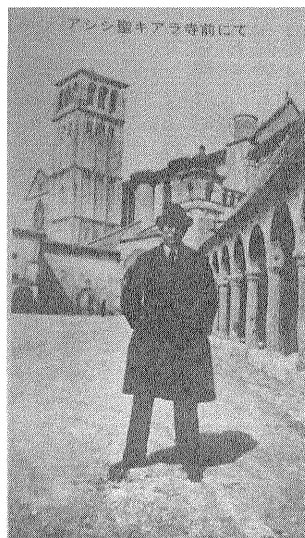


図4 アシシ聖キアラ寺の前に立つ
和辻哲郎
(出典：和辻哲郎『妻 和辻照への手紙』下〔講談社学術文庫〕、講談社、1977年、162ページ)

3 「国民性研究」としての「人間学」

こうした和辻の行状を検討して、苅部直は「もっぱら留学仲間やヨーロッパ滞在中の日本人と語らい、食事をし、観光に出かける」和辻は、いわば「現地人の生活を外から眺める」距

を探索が必要があることもわからない、だから人は自分が知らなければならぬものを探すべきことなどできない——という理屈となる。外国語での交際嫌いについては、漱石の「倫敦消息」にも「西洋へ来て無弁舌なる英語でもつて窮屈な交際をやるのは尤も嫌ひだ」との述懐があったことが思い出される。

京都学派の航跡を丹念にたどった竹田篤司は、とかく人間味が希薄な哲学者たちの洋行記録のなかで、和辻の場合は例外的だと述べる。だが、政治学を専門とする苅部直も観察するように、和辻の場合、それだけにかえって「現地人」との接触の希薄さが顕著に目立つ。すなわち和辻の留学に「著しい特徴は、和辻が現地の住人と交流らしい交流を全く持っていない点である」。実際、「七ヶ月のベルリン生活で日常的に会話をするドイツ人は、下宿の女主人と語学教師のみ」だった。和辻は、二年の予定を一年半で切り上げて帰国する了解が得られた段階で、前述の田辺元に対して旅先のフイレンツェから手紙を認め、「折角書いて頂いたハイデッガーへの紹介状を使わず」に終わったことを詫びている（一九二八年〔昭和三年〕三月二十六日）。対話による哲学という古代ギリシャの理念は、和辻にあつては、本場の西欧では、ついに実地に移されるには至らない。むしろ下宿での孤独な読書三昧のほうがはるかに能率が上がるというのが、和辻の対話原理拒絶の言い分であり、妻・照宛ての膨大な量の手紙による通信が、その滞在生活の内実を伝えている。

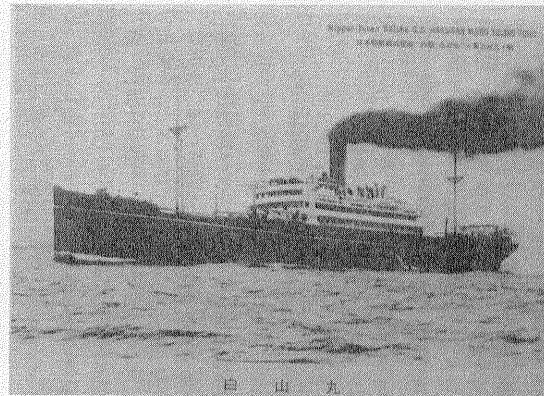


図3 白山丸
(出典：和辻哲郎『妻 和辻照への手紙』上〔講談社学術文庫〕、講談社、1977年、17ページ)

礼」（岩波書店、一九一九年）、『日本精神史研究』（岩波書店、一九二六年）ほかの著述活動によって社会的地位を築いていた。京都帝国大学の助教授に任命されるに伴い、和辻には義務としての外国留学が課せられた。だが、欧州留学に旅立った時点で、和辻は満年齢で三十七を迎えていた。森鷗外のように「処女のごとき」感性をもって滞在先に素直に適応するには、もはやあまりに遅きに失していた。四歳年上で親交があった木下至太郎・太田正雄（一八八五—一九四五）は、一九二二年（大正十一年）から翌年にかけて欧州に滞在していたが、ドイツ語・フランス語に達者だったその至太郎でさえ、パリのサロンでは疎外感を禁じえなかった。いまやそのときの至太郎と同じ三十七歳を迎えた和辻は、旅先で「神経衰弱」となった先輩や同僚たち誰彼の噂から、自分も「神経衰弱」にならないかと心配する。もとより妻子から離れる生活など本望ではなく、不本意ながら「しぶしぶ」の洋行だった。

留学先のベルリンに到着してほどなく、和辻は京都での上司である田辺元（一八八五—一九六二）宛てに、ベルリン大学での「講義には大分失望」（一九二七年〔昭和二年〕六月三日）と報告している。岩波茂雄（二八八一—一九四六）宛てにも、「よく解る講義は内容があまり簡単でつまらなくなるし、早口で解らない講義はまた解らない事で馬鹿ばかしくなる」と打ち明ける。「言葉が不自由」だが「解った限りでは感服でき」ず、聴講など二週間ほどで切り上げてしまったという。わかる講義はくだらない、わからない講義は聴いても無意味、という反応は、あたら教養はあるのに聴き取りが不如意な場合に典型的だが、この意思疎通不全は、哲学的にはプラトンが対話篇『メノン』で述べた二律背反——知っているものはいまさら探すまでもなく、知っていなければ、それ



図5 フィレンツェのウフィーツィ画廊の前で

離感を維持することに終始していて、その結果、欧州滞在によってかえって「日本人の「国民性」を発見することになるのも当然」だったと推論している。ここで帰国後の著作『風土——人間学的考察』が、「人間学」という新たな衣装をまとった新種の日本人「国民性」研究だったという事実がきわめて明瞭に浮かび上がる。

日本人の国民性に関する議論は、日露戦争後に流行を見る。先に触れた井上哲次郎には「教育勅語」の理念を敷衍・浸透させることを目的とした『国民道德概論』（三省堂、一九一二年）が知られ、その最終章は「国民性批判」を含む。和辻が井上に反目した事情や、井上の授業で種本の図星を指して揶揄したといった逸話は、しばしば取り沙汰されてきた。^① 漱石とも同年輩で、東京帝国大学の国語国文学教室の教授を務めた芳賀矢一（一八六七—一九二七）には『国民性十論』（富山房、一九〇八年）があり、こうした風潮に倣って、中国でも国民性に関する議論が盛んになる。その典型が戴季陶（一八九一—一九四九）の『日本論』（民智書局、一九二七年）だろう。戴の議論は一方で日本の軍国主義化への批判を含むが、同時に日本の近代化に照らして中国の国民性への反省をも促している。戴の著作は板垣退助や秋山真之ほか、彼が日本滞在によって直接面識を得た人物を取り上げた読み物だが、和辻の場合もまた、外国経験が「国民性」への問いの契機となった。帰国直後の「国民性の考察」（一九二八—一九二九年）と題する講義ノートでは、「関心の中心」である「国民性」の問題には、日本を出発するときにはまだ意識していなかった、と和辻は述べている。「東亜細亜欧州の諸国土を見て廻つて日本に帰来した時、自分には日本の山川風土、風俗、人間の性格などが実に目面しく特異なものに感ぜられた」^②。自国の国民性に関する反省は、他者観察のなかに胚胎する。戴季陶『日本論』は一九三四年（昭和九年）の安藤文郎訳・章華社版ほかで版を重ねるが、これが和辻哲郎の『風土』と同時代に読まれたことを、まずこの時点で確認しておきたい。^③ 和辻は洋行

を経て「国民道德論」へと回帰した面がある。この問題には、本章の最後で、再び立ち戻ってくることになる。

4 先行世代・同世代

伊藤吉之助

ここで、戦前に欧州に留学した日本の哲学者のなかでの和辻の位置を確かめるために、いくつか補助線を引いてみたい。まず和辻に先行する世代として、伊藤吉之助（一八五一—一九六一）を取り上げよう。伊藤は井上哲次郎（一八五六—一九四四）門下だが、通称イノテツは帝国大学で日本人として最初の哲学教授となった人物として著名である。一八八四年（明治十七年）から九〇年まで七年に及ぶドイツ留学を果たし、才気煥発な如才さが近年、再評価されつつある。^④ その井上について、ケーベル先生ことラファエル・フォン・ケーベル（一八四八—一九二三）は「悪い人間ではない、stupid なだけだ」との評をなしたと、安倍能成（一八八三—一九六六）は伝えている。^⑤ そのうえで安倍は伊藤の「学才」は評価しながらも、「後輩に対しては好悪を露骨に横暴に発揮しながら、井上氏に屈服して御用を務めた忍耐力を尊敬する気にはなれない」との手厳しい評価を辞さない。その伊藤は一九一九年（大正八年）に三十四歳でドイツ留学を果たし、まだ若いハイデガーを私教師として雇用している。今道友信によれば、ハイデガーの「存在と時間」（和辻は『有と時間』と訳す）の鍵言葉の一つである「世界内存在」（in-der-Welt-sein）は岡倉覚三『茶の本』（The Book of Tea）（一九〇六年）に見える being in the world という表現に由来し、これはそもそも荘周の「処世」の術語の間接的なドイツ語訳だという。岡倉のこの本のシュタインドルフによる独訳 *Das Buch von Tee*（一九一八年）をハイデガーに渡したのはほかならぬ伊藤吉之助、一九一九年のことだったという。^⑥ ここからハイデガーは「世界内存在の分析」を展開するわけだが、断りなくこの訳語を流用したハイデガーに対して、伊藤吉之助先生はひどく立腹だったという逸話が残されている。その

ハイデガーと同年齢だった和辻は、欧州留学から戻ると、「世の中」にいわば投げ出された存在としての人間の「間柄」*Beziehung* を焦点とする「人間」学の構築へと向かう。ハイデガーと和辻とは強い類縁性があるが、その並行性の背後には、伊藤吉之助の存在を想起すべきだろう。

九鬼周造

次に和辻の同世代として見落とせないのが、九鬼周造（一八八八—一九四二）である。九鬼隆一（一八五〇—一九三一）の息子である周造は、和辻より七年早く、一九二一年（大正十年）には渡欧し、新カント派で西南ドイツ学派の雄ハインリッヒ・リッケルト（一八六三—一九三六）に師事している。第一次世界大戦敗戦後のドイツの天文学的なインフレのさなか、伊藤にもまして金銭的には自由になかったパロン九鬼は、ハイデルベルク大学で、なんと大御所教授リッケルトを私邸に呼んで講義を受けるといった贅沢な経験をしたばかりか、リッケルトに飽き足らないとパリに移り、アンリ・ベルクソン（一八五九—一九四二）やレオン・ブランシュウィック（一八六九—一九四四）らとも交流をもち、ボンテニーの哲学討論会にもアジアからただ一人参加し（記念写真のスナップに夫人とともに納まっている）、若き師範学校生徒のジャン・ポール・サルトルを家庭教師に雇う。さらに再度ドイツはマールブルクに移り、ハイデガーと親交を結んでいる。このようにすっかり欧州になじんだ様子の九鬼に、和辻は「十何年かぶり」にパリで二八年四月六日に再会しているが、そこで和辻はどのような感慨を抱いたのだろうか。

戦後になってハイデガーは、「或る日本人」（手塚富雄）との対話のなかで故・九鬼周造に言及している。そこでハイデガーは、九鬼が日本的なる「イキ」をあまりに見事にヨーロッパの言語で究明し尽くしてしまい、その結果、ハイデガーら欧州の哲学者には「日本の言葉の心が閉じられたままになっていた」こと、そしてそれがその後も継続していることに、言語上の「危険」を表明した。その裏には、哲学はギリシャ語とドイツ語でしか営めないものだとするハイデガーの信念が隠されていたはずだ。『いきの構造』（岩波書店、一九三〇年）に続く『偶

然性の問題』（岩波書店、一九三五年）は、ゴットフリート・ライプニッツの「可能世界」論をも踏まえている。だがこの学術的著作には、日本語で哲学を営むことの文体的・語彙論的困難も滲み出ている。九鬼自身は、なぜ自分がいま、パリにはおらず、京都で大学の教授会などに出席していなければならないのかと自問し、居心地の悪さを感じ続けていた。いまある自分とは違った、別の「可能世界」に生きることを許されない境涯——その「偶然性」の悪戯について哲学的な考察をめぐらすすほかなかった九鬼の生涯を、そこに透視することも許されるだろう。

京都帝国大学で和辻の同僚となるこの九鬼の『偶然性の問題』は、欧州での七年にわたる長期滞在の成果、欧州の思索の産物だった。これとはきわめて対照的なことに、同じ一九三五年に公刊された和辻の『風土』は、一年半という短期間の旅程、それももっぱら観光旅行のさなかに得た直観に肉付けをすることになった、いわば促成栽培にして寄せ集めの性格が濃い著作である。和辻の『風土』は、はたしてハイデガーが九鬼の思索に対して抱いた「危険」に対処しえたのか、否か。この問いに答えるのは容易ではあるまいが、それに先立つ予備的作業として、和辻の洋行で同船となった、いま一人の美学者の事跡に簡単に触れておきたい。東京大学の美学教室助教授、大西克禮（一八八八—一九五九）である。

大西克禮

一年ほどのドイツ滞在からの帰国後、カントに関する博士論文を（日本に）提出した大西克禮は、それに続いて『幽玄とあはれ』（岩波書店、一九三九年）、『風雅論——さびの研究』（岩波書店、一九四〇年）、『万葉集の自然感情』（岩波書店、一九四三年）など、日本あるいは東洋美学に関する主著を矢継ぎ早に刊行している。それらの著作を通じて、大西は西洋美学と東洋美学の比較を構想する。大西によれば、西洋では芸術美的契機（*Kunststhesische Moment*）が支配的であるのに対して、東洋とりわけ日本では自然美的契機（*Natursthesische Moment*）が主要であり、「東洋殊に日本などでは、気象風土等の関係によつて所謂自然美即ち自然物を対象とす

るところの美的体験が、その範囲に於いても、その深度においても、早くから著しく発達した」とする。そのうえで普遍的な美的範疇として「美・崇高・フモール」の三つを指摘し、西洋ではそれらが「優美・悲劇性・滑稽」という様相を帯びるのに対して、東洋＝日本では「あわれ・幽玄・寂び」という様相を帯びる、との図式を提唱する。

これを論証するために、大西は多くの詩歌から典型をなす用例を抽出する。そこには西洋起源の普遍概念に寄り添いながらも（それなくしては、そもそも議論の対象として相手にされない）、西洋との差異、派生形態として東洋の美学を位置づけようとする努力が明白である（さもなくば、東洋美学は西洋美学に吸収されてしまい、存在価値そのものを喪失しかねまい）。換言すれば、西洋の学術体系や美的範疇にはあくまで服従しながら、その逸脱的派生にして、西洋的価値観には還元不能な特性を記述することで東洋美学を基礎づけようとする姿勢が顕著である。とりわけ幽玄、あわれ、わびなどの中世美学にあつては、「深み」(Tiefe)あるいは「幽暗性」(Dunkelheit)に日本の特性を見いだす論調が見られる。これは結果的には、西洋的術語の明晰さから逃れた要素に日本の特性を求めるという神秘主義、晦渋志向ともいえ、ハイデガーが唱えた隠蔽性あるいは存在忘却の議論との並行性もある程度は認めることができるだろう。

大西の著作には、日本的・美的特性を普遍的な土俵で説明しようとする志向が顕著である。だが大西は *Tiefe* *Dunkelheit* などのドイツ語を用いながら、これらの著作をドイツ語で世に問おうとはしない。その一方で、ひたすら日本の事例だけによって「東洋美学」を描こうとする傾向も否定できない。先行する世代の新渡戸稲造（一八六二—一九三三）が『武士道』（一九〇〇年）を、岡倉覚三（一八六三—一九一三）が『茶の本』（一九〇六年）を、ともに英語で世に問うたのに比べれば、和辻や大西が主著をもつばら日本語で著述したことには、欧米への発信忌避と、いわば「本場」への「場末」の遠慮と、さらにそれとは裏腹な内弁慶な姿勢を指摘せざるをえない。それはある意味では、外国航路に頼った洋行から、日本郵船による自前の洋行への変化に対応する、時代の違いのなせる業、必然の副作用でもあった。「東洋美学」研究の盛行は、洋行帰りの故郷再発見というだけではなく、

哲学者の洋行がもはや賞味期限切れになり、意味を失おうとしていた時代相の反映でもあった。そして西洋美学に対して東洋美学を主張する際に大西が援用した「気象風土」といった表現には、同船の和辻との交友の痕跡が刻印され、それ自体当時の知的「気象風土」を傍証しているものかもしれない。²⁰

5 『存在と時間』から『風土』へ——同時代性の刻印

ここまでの準備のうえで、和辻哲郎の欧州航路による「洋行」の「時間性」の検討に移りたい。

『風土』の序言を信じるかぎり、和辻が「風土性」の問題を考え始めたのは、一九二七年の初夏、ベルリンにおいてハイデッガーの『有と時間』を読んだ時である。単純に言うならば「時間性がかく主体的存在構造として活かされたときに、なぜ同時に空間性が、同じく根源的な存在構造として、活かされて来ないのか、それが自分には問題であった」という。とはいえ、これは一九二七年（昭和二年）の文章ではない。あくまで序言が書かれた三五年八月の文章として読むべきだろう。ここできさか興味深いのは、九鬼周造が「ハイデッガーの哲学」と題した文章（一九三三年三月）で、「ハイデッガーが公開性を有する配慮的時間または世界時間を非原本的なものと見ることは、共同相互存在の説にも拘わらず空間の実存的展望を封鎖するものではあるまいか」と述べていることである。『風土』にあつては、ハイデッガーの『存在と時間』の向こうを張った反措定といった壮大な野心は、序言に限られた修辭にとどまっていて、それが思索として『風土』全体を貫いているとまでは言い難い。九鬼が言う「空間の実存的展望」の必要性に対する和辻の自覚が高まっていたのは、むしろ『風土』を構成する各章を執筆していく過程でのことではなかったか。とはいえ、『風土』にそうした思索への前哨が盛られることになった契機としては、やはり欧州航路で到着したベルリンで、たまたまその時期に刊行された『存在と時間』を熟読した、という契機を抜きにするわけにはいくまい。この時間的符合という偶然性が、『風土』の性格を規定し



図6 土田麦僊「馬拉加（マラッカ）の船着き場」
（出典：国画創作協会同入『欧洲芸術巡礼紀行』十字館、1923年、25ページ）

ここに出現してくるのが「共同世界」(Miwelt)であり、そこでの現存在のありようは、「共同現存在」(Midsaen)分析の対象となる。そしてこの共同性が「我々」という主語の使用を要請する。「我々」は常に、すでにある関係性の束のなかに生まれてくる。わかりやすい例は言語であって、我々は決して個的な主体として言語を紡ぎ出していくわけではない。我々は我々の生誕に先行する言語という共同世界の内部に産み落とされ、そこにさらされることで発話し、己が現存在を成型していく。我々はあくまで事後的にそこにある自分を見いだす sich befinden であるわけだが、これをハイデガーは「情状性」(Befindlichkeit)と呼んだのだろう。普通「環境」とはドイツ語では Umwelt と呼ばれる。そこにはユクスキュルの環境世界論の影響も指摘されるが、和辻に言わせれば、こうした通常の「環境」理解こそが、道具(Zeug)のように「手近にみいだされる」存在(Zuhandensein)の理解を通して他人が出現すると思ひ込む、主一客観主義的誤謬の根源だ、ということにもなるだろう。Miwelt はこうした「環境」世界観の誤謬を訂正するための術語であり、それこそオーギュ

読み直してみても、いかにも未消化で取って付けたような印象を避け難い。だがこの個所は和辻がハイデガーと対峙した苦心の行文であり、哲学的にはきわめて重要だった。にもかかわらず、オーギュスタン・ベルクも指摘するように、この個所の意義は通俗的な読解からは見落とされ、とりわけ英語やドイツ語の訳では、和辻が日本語に移入するうえで払った配慮——「風土」と「風土性」の区別——は、ことごとく無視されてきたと言えるだろう。

同時に、人間存在を「死への存在」(Sein zum Tode)と規定したハイデガーに対して、和辻が「生への存在」としての人間学を志向した裏にも、もう一つの時間的符合があっただろう。すなわちヴィルヘルム・デイルタイの遺著が全集第七巻『精神諸科学における歴史的世界の構成』(Wilhelm Dilthey's Gesammelte Schriften, Bd. 7, 1927)として刊行されたのも、たまたま和辻の留学期間に重なる一九二七年の出来事だったからである。デイルタイは人間活動が織り成す経験的現実の総体を、根源的な生(Leben)の表現として捉えたが、こうしたデイルタイ晩年の思想は、『存在と時間』を執筆していた段階のハイデガーにはまだ知られていなかった。だがそれなら「歴史的世界の構成」は『風土』の「風土性」とどのように関わるのか。

ここで、和辻哲郎が帰国後の『倫理学——人間の学としての倫理学の意義及び方法』(岩波書店、一九三一年)に書き付けた次の個所が重要となる。すなわち、「有[Sein]の理解を介してのみ他人が出て来ると考えたところに「ハイデガーの」現有(Dasein)分析の著しい限界がある」との批判である。苅部直はこの「有」に「道具的世界との交渉」と割り注を入れているが、これは苅部も断るとおり、あくまで和辻的な「人間学的」解釈だろう。他方、大橋良介は、和辻は「有」を人間学の水準で捉えたために、ハイデガーの形而上学批判の射程を見落としたと指摘する。これは現在のハイデガー哲学研究から見ても正当な指摘だろうが、しかしここで両者の議論は循環している。というのも和辻の誤認は、和辻の「人間学」の文脈にハイデガーを引き込むために必要な、意図的「誤読」だったはずだからだ。実際、大橋も正当に指摘するとおり、和辻にとつては Dasein=人間存在とは、人と人との「間」をこそ契機(Moment)とする存在であり、その「世間」[das Man]をも含む「間」を和辻は「風土性」と定義するからである。「生への存在」としての現存在は、ハイデガーが語源から力説するとおり、世界に存在(existence)すなわち、世界のうちに外(ex-)在(is-ere)させられている。寒さを感じるとき「われわれ自身が寒さのうちに外出している」。寒さという状況に我々はさらされて、露出(ex-pose)されている。これが「間柄」の原初の姿であるとする哲学的な議論を、和辻は『風土』冒頭の「風土の基礎理論」で展開する。今日

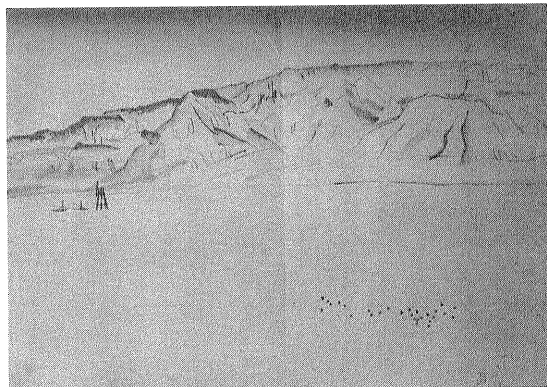


図7 土田麦僊「蘇士（スエズ）港頭」
（出典：前掲『歐洲芸術巡礼紀行』35ページ）

ここに露呈したユダヤ人⇨シナ人というイメージは、上海体験と欧州滞在との見聞が当時のユダヤ民族に関する通念のうえに融合したものである。それに対して「国民的共同社会」として古代ギリシャの「ポリス」と日本とを類比するのは、フュステル・ド・クランジュ（一八三〇—一八八九）の『古代都市』（一九〇一年）から得た着想だろう。つとに小泉八雲ことラファディオ・ハーンは、ド・クランジュが描く古代ギリシャと日本の宗教生活との類似に驚嘆していたが、ドイツの哲学的随筆家として人気があったヘルマン・カイザーリンク（一八八〇—一九四六）も、その人口に膾炙した『ある哲学者の旅日記』（*Das Reiseagebuch eines Philosophen*, 一九一九年）で、『古代都市』に照らし合わせて日本を描き出していた。和辻は敗戦後の『ポリス的人間の倫理学』（白目書院、一九四八年）で、

これは「国民道徳論」（一九三二年〔昭和七年〕）へと発展を見せることになる。^{②③}

こうして、中国人気質との対比で「日本精神」（一九三四年）の特質を性格づけようとする省察が誕生する。ここで看過しないのは、日本と中国との「国民性」の対比が、ユダヤ人とギリシヤ人との対比に重ね合わせにされていることだろう。事実、いま引用した個所の直前に、和辻はいささか安易にも、こう書き付けていた。「シナ人はユダヤ人よりもユダヤ的であり、それに反して日本人はギリシヤ人よりもギリシヤ的である」、と。前者は国家という紐帯への信頼とは無縁に商業活動を営む移動集団であり、後者は祖先祭祀を軸とする複数の地縁共同体を総覧することで成立する国家理念である。ここには国境を越えた営利活動に対する漠然とした畏怖と不安とが兆している。その裏返しとして、「自覚せる人倫の実体としての国家」への和辻の傾斜が予感されるが、そ

スタン・ベルクが *milieu* という直訳の訳語で呼ぶ「風土性」の場にほかならないだろう。^{②④}

6 「風土性」から「国民道徳論」へ

ここで「風土性」への着目が、「洋行」の欧州航路上のきわめて偶然性の高い一つの体験と時間論的⇨世俗的 *zeitlich* に結び付いていったことに話を進めたい。すでに指摘されているとおり、洋行の途上、和辻は寄港地の上海（一九二七年二月二十一—二十二日）で、たまたま上海ゼネストを目撃する。その体験を直接反映するのが、帰国後の執筆となる「支那人の特性」（思想）一九二九年七月号、岩波書店）であり、そこでの観察は「風土」第三章第一節「シナ」に組み込まれる。白山丸が上海に入港したのは、ちょうど蔣介石の北伐軍が市外に迫り、これに呼応して上海総工会労働者による「同盟罷工が断行」され、軍閥政府・国民党軍と衝突している最中だった。この出来事は直後の蔣介石による四・一二クーデター、共産党弾圧へと連動していく。これらの突発事のため、上海出航と香港への入港は、予定より一日の遅延を見ることになる。

軍隊の市街乱入と掠奪の危機に瀕した「物情騒然」のさなか、租界の在留外国人たちは本国政府の庇護を頼りにする。これに対して「国家権力による保護」を求めない「無政府の生活」を身上とする中国民衆は、「租界のような逃げ場がないのにもかかわらず、悠々と往来を歩き、物を売っている」^{②⑤}。その「著しい対照に心から驚き」ながら、和辻は上海を立ち去ったという。和辻の脳裏には、関東大震災の折の経験が去来したことだろう。震災下にあっても国家権力への信頼を保ち、共同体的互助精神を発揮する東京市民の対極に位置するのが、和辻が見た中国民衆の姿だった。「他人の運命には無頓着に各人勝手に物を売り、危険がせまるとわれ先に逃げ出す」中国の「国民性」、あるいはより正確に表現するならば「国民性の欠如」。「団結を失って個人の立場においてシナ人と対するならば、日本人は到底シナ人の敵ではない」^{②⑥}



図8 黒田重太郎「小運河の一角」
(出典：前掲『欧洲芸術巡礼紀行』152ページ)

場を鮮明にしていくなことになる。

7 後続する世代との位相差

ここまで和辻の軌跡を『風土』の成立過程との関連で、いくつか確認してきた。ここで、和辻の年下の世代の同時代的な留学動向にも一瞥しておく必要があるだろう。京都大学で西田幾多郎門下と目される面々のなかでも、とりわけ傑出した才能を誇った三木清（一八九七—一九四五）は、岩波茂雄の財政的援助によって、つとに一九二三年五月から翌年八月にかけて、まずハイデルベルクに留学している。最初に出席したハインリヒ・リッケルトの講義は、日本ですでに読んでいた著作の繰り返しだったため、リッケルトから「非常に天分に優れた男」と評されたハイデガーがいるマールブルク大学に移り、ハイデガーの助手だったカール・レーヴィット（一八九七—一九七三）ほかとも親交をもった。二五年に帰国した三木は、翌年には『パスカルに於ける人間の研究』（岩波

田辺貞之助訳『古代都市』（仏蘭西古典文庫）、白水社、一九四八年）に基づいて、この説を敷衍する。女神アテーナーへの崇拜で結合するギリシャ古代都市国家の姿は、地方王権の祭祀が太陽女神アマテラスの祭祀へと統合されることで全国的王権が確立する——と見た和辻の古代日本国家観を、類比的に補強するものだった。敗戦後の和辻は、『国民統合の象徴』（勁草書房、一九四八年）ほかで、象徴天皇制を擁護する立

書店、一九二六年）を発表し、十二月に創刊された岩波文庫とも密接な関係を持ち、ジャーナリズムで超人的といつてよい健筆を振るい始める。こうした三木清の帰国後の活躍と相前後して、和辻は京都に移っている。

ここでは、その三木と同年輩で親しい間柄にあった由良哲次（一八九七—一九七九）に注目したい。家庭の事情から留学が遅れ、和辻に続き一九二八年に、シベリア鉄道経由でハンブルク大学に留学した由良は、そこでエルンスト・カッシーラー（一八七四—一九四五）に師事し、三一年に帰国する。留学中、西田幾多郎の『叡智的世界』（全集第五巻、一九二八年初出）をドイツ語に翻訳したものの、肝心の西田本人から出版許可が与えられず、出版企画は挫折したと伝えられる³⁴。ドイツで提出した博士論文は「精神科学と意志法則」であり、副論文では、大乘仏教唯識のアラヤ識とカントの意識一般との比較がなされたという。周知のとおり、和辻が日本で提出した博士論文『原始仏教の実践哲学』（岩波書店、一九二七年）は、中観派・唯識派のダルマ理解をエドムント・フッサールの現象学の本質直観や還元といった考えと重ね合わせて理解しようとしたものだった。これには、東京帝国大学の木村泰賢が流行に乗じた短絡と批判を加え、京都帝国大学の榎原三郎も和辻への博士号認定を拒否するなど、疑義や抵抗に迎えられたことが知られている³⁵。そうした批判にもかかわらず、当時の日本の哲学者はインド哲学と西洋哲学の認識論とを統合しようと試みていた。和辻哲郎と由良哲次とは、この点で明らかな並行性が見いだされる。同様の志向の先行例としては、なお未成熟ながら華嚴経を現象学によって解明しようとした土田杏村（一八九一—一九三四）の『文化学的研究 第一巻 象徴の哲学』（佐藤出版部、一九一九年）や『華嚴哲学小論攷』（内外出版、一九二二年）などが想起されるだろう。

この由良哲次の博士論文³⁶記署名者には、カッシーラーとも親密な関係にあったエルヴィン・パノフスキーの名前が見られるという。彼ら二人はともにユダヤ系だったため、アドルフ・ヒトラー政権の成立とともに、英米圏へと亡命を遂げることになる。帰国した由良は、この独文博士論文を下敷きとした日本語の著作『歴史哲学研究』（目黒書店、一九三七年）を旧友の三木清に献じている。だが、その由良はこの後、ナチス・ドイツの超国家主義思想との親和性を顕著にしていくな。一九三六年に洋行を果たした横光利一（一八九八—一九四七）は、帰

国後、国粹主義的傾向を強めるが、その未完の大作『旅愁』（改造社、一九四八年）の主人公・矢代は、由良哲次をモデルにしたという。その由良は、太平洋戦争期の著作『民族国家と世界観』（民族科学社、一九四三年）では、ユダヤ人の哲学には「民族」「歴史」が希薄であることを問題視する論調を辞さない。これは同時代の一般的傾向への同調とも見られるだろうが、前述のとおり、和辻のユダヤ人観にもこれと共通する部分がある。とともに由良は、皇學館大学の国語学者・山田孝雄との親交を密にし、「皇道哲学」の神懸かりの傾向を帯びていく。

こうした潮流と、和辻の同時期の著作『尊皇思想とその伝統』（日本倫理思想史、岩波書店、一九四三年）との違いはどこにあったのだろうか。端的に言えば、山田孝雄が平田篤胤に本居宣長の正統な後継者を見たのに対し、和辻は、神道をキリスト教的な一神教に引き付けて理解しようとする篤胤の理解を退ける。すなわち、天御中主神を主宰神と見て、死後の霊の行方を問う篤胤の「幽冥の道」に対して、和辻は、宣長の「神の道」は「明朗闊達」な「真昼の道」であると、対比させる⁽³⁷⁾。篤胤は、自らの神道宇宙論の理論化のためにはあえてキリスト教神学を援用することをも辞さないという高度の受容性、折衷性を示しながら、その結果として樹立した神道観では、著しく排他的で外界からの受容を拒絶するような神概念を確立する、という矛盾を犯している。和辻自身はここまで踏み込んだ指摘はしていない。とはいえ和辻は、外界から寛容に文化要素を摂取しながら時代的重層性を空間的に維持してきたところに日本文化の機能的特質を見る。こうした和辻の日本文化論構想に照らせば、平田篤胤の神道理解は神道の本質を歪める見解と映じただろう。この篤胤を絶対視する山田孝雄らの日本主義の論調が、和辻にとって学問的にも同意し難い謬見として批判すべき対象だったのは、当然というべきだろう。和辻はあくまでも、国家共同体の精神的韌帯をなす祭祀としての神道のうちに、「個々の特殊な民族」の一つたる日本民族の「現実性」の現れ、「地理的・風土的な人倫的精神」の姿を見る。そしてこのような和辻の神道解釈のうえにも、実は欧州航路体験、とりわけ旅行の初期に上海で目撃したゼネストの光景が、否定的媒介、ネガの影響として、意外にも執拗な影を落としていたはずである。

8 古代への憧憬

それでは、古代ギリシャと古代日本を類比する発想は、和辻の「洋行」とどのような関係をもっていたのか。きわめて興味深いことに、和辻は留学中もギリシャ観光はせず、現地観察を避けることで、かえってギリシャと日本の気候・クリマの類似という誤解を温存していたように見える。和辻は安倍能成の現地での見聞にギリシャの気候に関する統計資料を添え、それを根拠にもつばら古代ギリシャの事例によってエーゲ海文化圏の風土を考察する。妻への手紙を基点に練られたといつていい「牧場」と題する論文は、洋行航路でギリシャを通過した後、に望見した、三月末の「シチリアの春」の印象を核とする。ギリシャの小規模都市国家とローマ帝国との違いは、これまたギリシャでの「水の制限」をローマが水道建設によって突破したとする「亀井高孝氏のギリシア旅行のあと」の仮説に基づいて展開される。これらの個所は、追って『風土』第二章第三節に組み込まれるが、そこで和辻は、欧州の「牧場的風土においては理性の光」に注目する一方、「モンスーンの風土においては感情的洗練」を取り上げて、両者を対比させながらも、それらが統合される理想を語る。これと呼応するように、『風土』に統合されるこれらの文章と並行して執筆された和辻の「国民道徳論」は、G・W・F・ヘーゲルが語る「自覚せる人倫的実体としての国家」(die selbstbewusste sittliche Substanz)の実現を日本に希求し、そこに「ギリシアの国民的道徳の偉大な復興と発展」を投影する傾向を、色濃く宿していた⁽³⁸⁾。

井上章一は、『法隆寺への精神史』で、和辻の時代に至る建築史研究の再発掘を通じて、和辻が『古寺巡礼』で見せる論調に疑問を突き付けた。法隆寺のエンタシスのかたに古代ギリシャの神殿を透視し、百済観音の微笑に古代ギリシャの古拙の口元を重ね合やす和辻――井上によれば、こうした和辻の論調は、執筆当時の「美術史学界の趨勢からみれば、流行おくれという観はいなめ」ず、加えてこの「古風なヘレニズム東漸説」は、学

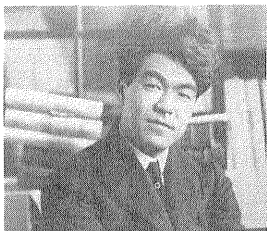


図9 美術研究所創設当時の矢代幸雄（1930年頃）

あり、そうした関係もあって和辻は三溪園に集う美術愛好家たちと交渉をもった。『古寺巡礼』冒頭に見える「T君」は田中一松、「F氏」は福井利吉郎だろうが、和辻はアジャランター壁画の模写を鑑賞した足で彼らと夜行に乗り、翌日の朝、すなわち五月六日、京都からは「Z君」すなわち原富太郎の長男・善三郎夫妻と奈良に向かう。数日後に法隆寺の金銅壁画を拝観した一行は、アジャランターの壁画との類似や相違について夢中に議論したものとおぼしい。そこで和辻は、『風土』を先取りする私的先入観を銜いなく披瀝している。「氣候や風土や人情において、あの広漠たる「インド」大陸と地中海の半島はまるで異なっているが、日本とギリシアとはかなり近接している」。「だからインドの肉感的な画も、この「日本の湿潤しめやかな」涙に濾過される時には、透明な美しさに変化する。そうしてそこにギリシア人の美意識がはるかなる兄弟を見出すのである」。以上の経緯を踏まえるならば、井上の主張とは違って、むしろ『古寺巡礼』のこうした和辻の先入観が通奏低音となって、やがて『風土』に再噴出したものと認めるべきだろう。加えて「しめやかな心情」とは、欧州から帰国後の和辻が「国民道徳論」で、古代日本に想定した民主的共同体を彩る「国民性」を古代希臘（ヘラス）と引き比べながら形容するときのお得意の用語となるだろう。

それからほぼ十年を經過した一九二八年三月二十六日。欧州滞在の最後を飾る贅沢といつていいイタリア旅行の旅先で、和辻は妻の昭宛てに、フィレンツェのウフィツチ美術館訪問の折に購入したとおぼしき絵葉書に文を添えた。別に送る、と記した絵柄は、ボッティチェリの『春』から取られたものだが、全体図ではなく、女神たちの足元に咲く草花の部分拡大写真だった。不注意な鑑賞者なら見落としてしまいかねない、こまかな細部だが、その線描には琳派の屏風にも似た味わいが見られることを観察した和辻は、こうした絵葉書は「たぶん矢代がすすめて作らせたのだらうと思うが」と書き込んでいる。

タゴールの初来日の折、その通訳を拝命したのは、東京帝国大学を卒業したばかりの、矢代幸雄（一八九〇—一九七五）だった。一九二一年から二五年に至る時期

術的根拠も脆弱だった。とかく「時流便乗型と思われやすい和辻」が、実際にはそうではなかったことに、井上はある種の感慨を催している。と同時に井上は、和辻は『古寺巡礼』では古代ギリシアと古代日本との類似を強調したが、それは『風土』での認識とは断絶している、と主張する。井上はこうした和辻の「変節」を、建築史学界の論調の時代的変化と並行したものとして理解している。だがここには「時流便乗」では説明できなかったはずの和辻の議論を「時代精神の存在」の反映と見る無理が露呈してはいまいか。さらに和辻が『風土』でギリシアと日本との並行性を否定したという見解は、むしろ井上の側の先入観の反映ではないだろうか。和辻の議論は、もとより学術的な厳密さや、先駆性を基準とした等高線のなかには収まり難い。むしろその文面の背後には、和辻のきわめて個人的な経験や時間的偶然が彼に許した、空間的な出会いが隠されている。とすれば、そちらを発掘するほうが、和辻の著作が描く「風土性」の理解にはより適しているのではあるまいか。和辻の斑鳩・法隆寺への愛着は、おそらくは和辻家の出身地、姫路の西に位置する太子町の古刹、斑鳩寺、あるいは幼少を過ごした加古川の鶴林寺の太子堂の思い出と、ひそかに通じているのだろう。和辻において、古代への憧憬は、幼少への回帰と融合する。

9 細部観察の直観力

そのうえで、あらためて『古寺巡礼』の冒頭を思い出そう。それは横浜の三溪園、原富太郎が築いた広大な庭園に、アジャランターの壁画の模写が持ち込まれ、それを鑑賞した折の話から始まる。一九一六年にはインドの詩人にしてアジア人としてはじめてノーベル賞を受賞したばかりのロビンドロナト・タゴールが来日した。そのタゴールからインドに招かれた荒井寛方は、原からの資金援助を得て、仲間とともにアジャランター遺跡で壁画の模写に従事した。その成果が一八年には日本に招来された。そもそも和辻の妻の昭が富太郎の長女・春子と親友で

を欧州で過ごした矢代は、二五年、英文著作『サンドロ・ボッティチエリ』（高階秀爾他訳、吉川逸治／摩寿意善郎監修、岩波書店、一九七七年）の扉に献辞を記して、故国へと旅立った。作品の細部拡大写真を多数活用して筆跡を鑑定し、それによって斬新な比較同定を提唱したことは矢代の功績とされるが、その矢代がメデイチ協会から発刊した三冊本の名著に挿入したのと同様の部分写真が、すでに和辻が訪問したウフィツチ美術館では絵葉書になっていた。その背景には、画家の個人的な筆法は無意識的な描線に露呈するとしたジョヴァンニ・モレルの説や、個々人によって異なる耳の形態に注目して、顔写真から下手人の割り出しを試みた犯罪捜査学、さらには微細な兆候のうちに病理を探り当てようとする精神分析に至る潮流が収斂していた。由良哲次が師事した哲学者カッシーラーやパノフスキーがルネサンス研究の牙城とした特異な美術図書館の創始者アビ・ヴァールブルクもまた、当時フィレンツェでは、矢代の師匠バーナード・ベレンソンと競合する関係にあって、こうした細部の兆候学に取り組んでいた奇想の美術史家だった。

そのヴァールブルクお得意の警句は「神は細部に宿りたまう」というものであり、そこでは一見注目にも値しない細部から全体を演繹する直観力が重視された。おそらくは矢代の卓見に起源をもつ絵葉書を手にした和辻に、そこまでの自覚があったとは言えまいが、和辻もまた絵葉書という媒体を駆使し、その図像の比較から風土の特性を描き上げるという操作にいそしんでいる。そこには微細な細部から大胆な総論を演繹する傾向がうかがえる。和辻と同船で渡欧した哲学者の出隆（一八九一—一九八〇）は、「一事から直ぐさま普遍的な結論を出す、というよりも、この一般的な事実で特殊な結論を立証しようとする」和辻の「論理の素直さ（というか、直情的か、単純性か、単刀直入か）」が「うらやましかった」と自伝に述べることになる。

和辻が注目したのは、たとえば「雑草が不在」なヨーロッパの牧場であるが、これまた「京都帝国大学農学部の大槻教授」からの示唆だったらしい。同様に、イタリアの松が手入れもしないのに幾何学的な円錐形をなし、糸杉が垂直に細長く伸びていることを、和辻は自宅宛ての絵葉書で観察している。そしてここから和辻は、風の弱いヨーロッパの「牧場」と、モンストンの強風にさらされる日本の「桃山時代の襖絵に描かれるうねった樹の

姿」や、それとは一見したところ対照的な、日本庭園の檜や比叢の「人工的」な「規則正しさ」が、いかに人為的であるか——といった比較へと連想をたくましくする。欧州のように「自然が暴威を振るわないところでは自然は合理的な姿に己れを現わしてくる」というのである。

この観察が、征服すべき対象としての自然のうちに法則性を発見する西洋の「自然科学」を特徴づけ、それが「牧場的風土の産物」にほかならないとみなす説へと、和辻を導く。その傍ら、こうした比較論は、湿润に「自然の暴威」を見る「モンストン域の人間の構造を受容的・忍従的と把握する」方向へと和辻を誘ってもいく。それはまた、ハイデガーと和辻との気質や方法論の違いをも浮き彫りにする。ハイデガーは、「自然」を本質的に人間にとつての素材とみなし、そのなかで「道具的存在」(Zuhandensein)へと墮落した人間存在を批判する。それとは対照的に和辻は、制御不可能な自然のなかに産み落とされた人間同士の、人倫的(sittlich)な「共存在」(Miteinander)の「間柄」を「人格」に先行させ、結果的に「共同体」への融和の誘惑を「個」として拒絶しようとはしない。この両者の対比は、対象と方法論との癒着あるいは循環論法のように、西欧的な「形而上学」と東亜的・儒教的「人間学」との「風土的」差異をも示していた。

だが、『風土』での和辻哲郎の観察眼を、我知らず、同時代人の美術史家・矢代幸雄の近傍へと引き寄せてもいた、かの「細部に注目する直観力」は、はたしてモンストンに根ざした風土性の発露だったのか、それとも欧州との対決のなかで、欧州航路を体験した二人の同時代人に宿った、偶発的な時間性の契機だったのか。『風土』の刊行翌年には、高浜虚子が、横光利一と同船の欧州航路に沿って洋行し、道中で熱帯の季語や欧州の季語を織り込んだ発句を試みることになる。細部を瞬時に描いて世界全体を凝縮しようとする俳句の営みには、日本の風土性に根ざした美意識の集約を見ることもできるだろう。だが、こうして和辻の『風土』を矢代の「細部拡大観察」や、欧州航路の高浜虚子に結び付けようとする着眼そのものが、和辻の『風土』に屋上屋を架して、いたずらに反復を犯しかねないものだ、という危うさも否定し難い。とすれば、『風土』の著者の風土性と時間性にと決着をつけようとする企ては、もとより放棄したほうが賢明、というのが、とりあえずは、本稿の方法論的

限界を自覚した結論になるだろう。⁽⁵⁰⁾

注

- (1) 渡沢栄一「航西日誌（二八六七年三月二十六日〔慶応三年二月二十一日〕）」『渡沢栄一滞仏日記』（日本史籍協会叢書）、日本史籍協会、一九二八年（「航西日記」『渡沢栄一滞仏日記』（日本史籍協会叢書）、東京大学出版会、一九六七年、三一—三三ページ）
- (2) 福沢諭吉「西航記（一八六二年〔文久二年〕二月二十八日）」『福沢諭吉全集』第一巻、岩波書店、一九五八年、一七一—一八ページ、芳賀徹「大君の使節——幕末日本人の西欧体験」（中公新書）、中央公論社、一九六八年、参照
- (3) 欧州航路の確立については、園田英弘「世界一周の誕生——グローバルイズムの起源」（『文春新書』）、文藝春秋、二〇〇三年）が概観を与える。また日本近代の「洋行」の変質については、大久保喬樹「洋行の時代——岩倉使節団から横光利一まで」（『中公新書』）、中央公論新社、二〇〇八年）が的確かつ簡便。
- (4) 日本郵船と並行して、二十世紀初頭から、大阪商船が欧州航路以外の開拓を国家事業の一環として目指している。一九〇八年に最初の公のブラジル移民船となった笠戸丸（六千二百九トン、最初は台湾航路）と並んで、日露戦争での捕獲船だったカナダ丸（六千六百四十トン）の事跡が知られる。カナダ丸船長を務めた森勝衛（一八九〇—一九八九）は、二六年の東南アフリカ航路開設のために、「朝日新聞」の白川威海記者、「毎日新聞」の久富達夫記者を伴ってダーバンに回航し、九月二日に帰路出航の折には、当時南アフリカで人種差別反対を唱えていた若き作家・記者ウイリアム・ブルーマー（一九〇三—一九七三）とローレンス・ヴァン・デル・ポスト（一九〇六—一九九六）とを、船長独断で連れ帰った。ここからは南アフリカと日本とを結び付ける比較文化史・比較文学上興味深い事例が展開する。その一端については、日本海事広報協会『キャプテン森勝衛——海のもつこす七十年』（日本海事広報協会、一九七五年）、またLaurens van der Post, *Yet Being Someone Other*, The Hogarth Press, 1982, ローレンス・ヴァン・デル・ポスト『船長のオディッセー』（由良君美訳、日本海事広報協会、一九八七年）ほかを参照されたい。
- (5) 一九二〇年代初頭の欧州航路については、論すべき課題が多い。ほんの一例にすぎないが、一九二二年七月三十一

日に神戸を出航したクライスト丸（日本郵船）には小出橋重（一八八七—一九三二）、坂本繁二郎、裕伊之助、林矮衛らの画家たちが二等船室に、また小松清が三等船室に搭乗していた。小松はパリでグエン・アイコク（のちのホーチミン）と同一人物とされる）と接触していて、また密入国を果たした大杉栄（一八八五—一九二三）とも接触している。こうした係累から、同船の日本人画家たちもフランス秘密警察に監視された。当時パリ日本人会の書記を務めていた画家の青山義雄に回想がある。周知のとおり、大杉栄は『日本脱出記』（アルス、一九二三年）に見られるように、上海経由で二三年一月五日出帆、二月十三日にパリ着。この年のメーデーで演説をして逮捕され、サンテ監獄に収監され、強制送還で戻った日本で関東大震災に遭遇し、惨殺される。この時期の画家の旅行記としては、黒田重太郎（一八八七—一九七〇）による『欧州芸術巡礼紀行』（国画創作協会同人著、大阪時事新報社編纂、十字館、一九二三年）があり、小野竹橋（一八八九—一九七九）、土田麦僊（一八八七—一九三六）、野長瀬晩花（一八八九—一九六四）ら、京都の国画創作協会関係者の航海中、欧州滞在中の水彩やデッサンを掲載している。小松清（一九〇〇—一九六二）は結局二年から三年まで欧州に滞在し、人民戦線関係者ほかと交友する。三年に來日するアンドレ・マルローの出世作『人間の条件』（一九三四年）は上海の革命運動に取材した小説だが、そこに小松は、主人公格のキヨとして登場する。その生涯は、林俊／クロード・ピショワ『小松清——ヒューマニストの肖像』（白亜書房、一九九九年）に詳しい。

(6) とはいえ、第一次世界大戦中は、地中海からアラビア海、インド洋の海上交易の安全確保が、重大な問題だった。第一次世界大戦中、日本海軍がマルタ島へ駆逐艦を派遣したことが、「新しい歴史教科書を作る会」の教科書には特筆されている。これは従来日本の歴史教科書に記載された山東出兵の違法性を緩和して、国際連盟に協力した連合国側の一員としての日本の立場を強調する選択だろう。だがそこには、編集当時の政治問題だった湾岸への自衛隊派遣を、第一次世界大戦当時の歴史的事実によって正当化しようとする時局的配慮が露呈している。現在の利害に沿って過去の史実を選別する編集意図が教科書に反映された事例として、検討に値する。なお、京都大学を中心とするいわゆる京都学派で、和辻の次の世代を代表する科学史家の下村寅太郎（一九〇二—一九五五）には、野々宮朔の筆名で刊行した『東郷平八郎』（雑誌「知性」に連載、一九四三年）が知られ、講談社学術文庫版への解説は『ロシヤにおける広瀬武夫』（『朝日選書』、朝日新聞出版局、一九七六年）の著者・島田謹二が担当している。制海権が国家戦略の

機軸をなしていた時代の海軍組織の分析を通じて時代の精神史を描こうとする点で、これらの著者が共通の関心を抱いていたことは、福原麟太郎が両者を並べて書評している事実からも推測される。本件については、小林信行「円熟期の島田謹二教授——書誌の側面から（十三）」（東大比較文学会「比較文学研究」二〇一一年六月号、すずさわ書店）一二八ページ。これらの著書が軍人の「神格化」とは無縁な「日本精神史」探求であり、決して余技的な副産物ではなかったとの説は、大橋良介「京都学派と日本海軍——新史料「大島メモ」をめぐる」（『PHP選書』、PHP研究所、二〇〇一年）一二二ページが展開している。

(7) 和辻の田辺宛て私信の引用は、竹田篤司「物語『京都学派』」（中公叢書）、中央公論新社、二〇〇一年）一四一ページから。

(8) 安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』第二十五巻、岩波書店、一九九二年、二四八ページ

(9) 漱石のロンドンについては多くの論考があるが、ここは和田博文／真銅正宏／西村将洋／宮内淳子／和田桂子「言語都市・ロンドン——一八六一—一九四五」（藤原書店、二〇〇九年）二六二ページ。

(10) 荻部直「光の領国和辻哲郎」（現代自由学芸叢書）、創文社、一九九五年（荻部直「光の領国和辻哲郎」（岩波現代文庫）、岩波書店、二〇一〇年、一七三ページ）

(11) 勝部真長『青春の和辻哲郎』（中公新書）、中央公論社、一九八七年、一〇一—一〇四ページ。なお江島顕一「明治期における井上哲次郎の『国民道徳論』の形成過程に関する一考察——『勅語衍義』を中心として」、慶應義塾大学大学院社会学研究科編『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要——社会学・心理学・教育学——人間と社会の探究』第六十七号、慶應義塾大学大学院社会学研究科、二〇〇九年、一五—二九ページ

(12) 講義ノートは国立国会図書館蔵。そこからの引用は、前掲『光の領国』一七二ページ。これが改稿・推敲のうえ『風土』に組み込まれる。

(13) 董世奎「戴季陶『日本論』の構造および文体」（中国研究月報）二〇〇三年十二月号、中国研究所、一六—三三ページ。なお林語堂（一八九五—一九七六年）にも英語版が国際的に話題になった『我国土・我国民』（豊文書院、一九三八年）が知られ、その抗的な姿勢が顕著になるなか、阿部知二などが、時局柄必要な配慮は払いながらも、紹介に努めている。清朝遺臣として戦前期には日本でも高名だった辜鴻銘（一八五七—一九二八）の著作『支那人の精

神』(Spirit of the Chinese People)（目黒書店）も魚返善雄による日本語訳が一九四〇年には刊行される。なお、前掲『光の領国』は東京大学の和辻の前任者三教授と京大での前任者の藤井謙治郎がいずれも国民道徳論かそれに類する著作を刊行していることを注記している（第三章註十三）。同書巻末に収められた付録資料『東京帝国大学学術大観』文学部第十一章「倫理学科」のための和辻と金子武蔵による項目を見ると、中島力蔵、吉田静致、深作安文の先任教授が形作った「人格主義と国民道徳論」が和辻の着任によって「哲学的人間学にまで変容した」との認識が示される。逆に言えば和辻「人間学」はその背後に、単に国家の時代的要請というだけでなく、学統としての国民道徳論をも背負っていたことになる。前掲「光の領国和辻哲郎」（岩波現代文庫）、三二九—三三五ページ

(14) 関口すみ子『国民道徳とジェンダー——福沢諭吉・井上哲次郎・和辻哲郎』東京大学出版会、二〇〇七年

(15) 前掲「物語『京都学派』」二〇ページ。安倍能成「我が生ひ立ち——自叙伝」岩波書店、一九六六年。伊藤吉之助のヘーゲル演習については、今道友信「断章 空気への手紙」（TBSブリタニカ、一九八三年）八二—八七ページに興味深い回想がある。

(16) 今道友信「一哲学者の歩んだ道（第三回）二十世紀の終わりに」（中央公論）一九九九年一月号、中央公論新社

(17) 大橋良介『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』（講談社学術文庫）、講談社、二〇〇九年、一二〇ページ

(18) 同書一三七—一四一ページ。該当箇所は、Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd. 12: *Unterwegs zur Sprache*, Vittorio Klostermann, 1985, S. 85.

(19) 澤瀉久敬がフランス語訳しているが、正直なところ、こちらのほうがはるかに読みやすい。Kuki Shuzo, *Probleme de la contingence*, University of Tokyo Press, 1967, traduction et introduction par Omodaka Hisayuki. なお和辻は「日本語は哲学的思索にとって不向きな言語ではない」としながらも、それは「思索にとってはまだ処女である」と述べている。和辻哲郎「日本語と哲学の問題」「日本精神史研究」続「岩波書店、一九三五年。この点については、熊野純彦「和辻哲郎——文人哲学者の軌跡」（岩波新書——新赤版）、岩波書店、二〇〇九年）、第二章第三節および長谷川三千子「日本語の哲学へ」（ちくま新書）、筑摩書房、二〇一〇年）。

(20) そしてここまで分析を進めると、もう一人の美学者を想起せざるをえなくなる。鼓常良（一八八七—一九八一）である。鼓は留学中に執筆したドイツ語原稿を、ライプツヒのインゼル書店から一九二八年に *Kunst Japans* と題す

る研究書として公刊している。増補された日本語版は『日本藝術様式の研究』として三三年に章華社から八百ページを超える大冊として刊行される。本書は、西洋の美術が様式という枠組みにきちんと縁取られているのに対し、日本の芸術は時代的にも空間的にもそうした強固な枠組みをもたないとして、無框性 (Rahmenlosigkeit) の理念を提唱した著述である。これは和辻の「日本文化の重層性」とも踵を接する立論であり、また西欧世界との対比で日本美学の特徴を論じるという意味でも、時代の潮流に棹差した特徴を備えている。だがドイツ語で著述をなした鼓は、帰国後、紀平正美などに急速に接近し、戦時中はナチス・ドイツの宣伝活動に積極的に関与する。外国語で直接自己主張できた人材が、帰国後かえって国粹的傾向を強め、国家主義思想の鼓吹に邁進した典型例が、鼓常良に見られる。

(21) これにつき、苅部直「間柄」とその波紋」『Heidegger Forum, vol.3, 2009. の配布資料から示唆を得た。

(22) 前掲『光の領国』一七八—一八二ページに、きわめて切れ味のよい要約が見られる。続く和辻のデイルタイ読書に關しても、詳しくは同書第三章註三五、三六を参照されたい。なお和辻によるハイデガー批判については、嶺秀樹『ハイデガーと日本の哲学——和辻哲郎、九鬼周造、田辺元』(Minerva 21世紀ライブラリー)、ミネルヴァ書房、二〇〇二年)。ハイデガーと和辻の Dasein 解釈の比較については、ハンス・ペーター・リーダーバッハ『ハイデガーと和辻哲郎』(平田裕之訳、新書館、二〇〇六年)、第三章。紙面の都合で、これらの著書の見解との異同にはここでは踏み込まない。

(23) ローディ・フリトヨフ『ハイデガーとデイルタイ』「思想」一九八六年十一月号、岩波書店、一一ページ

(24) 前掲『倫理学』一〇三—一〇四ページ。改訂のうえ安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』第九巻、岩波書店、一九九〇年、一六二ページ。前掲「間柄」とその波紋」一八一ページに引用。そこに見える苅部の割り注は、苅部自身が「ハイデガー自身にいわせれば誤読であろう」(同一七九ページ)と断るとおり、あくまで和辻による理解をハイデガー用語で補う解釈だろう。

(25) 前掲『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』一五四—一五七ページ。言うまでもなく、「人と人との間」は木村敏が精神病理学の立場から展開する議論であり、それは別注に述べるビンズヴァンガーの現存在分析と密接な連関をもつ。

(26) 前掲『風土』第一章第一節「風土の現象」(和辻哲郎『風土——人間学的考察』[岩波文庫]、岩波書店、一九七九

年、一二二—一二三)

(27) Watsuji Tetsurō, *Fudo, le milieu humain, commentaire et traduction par Augustin Berque, Nichibunken-CNRS Éditions*, 2011, pp.11-29. フォン・ヘルクは英訳やドイツ語訳が「風土」と「風土性」との差異を見落とす一方、「契機」moment という、和辻(および先に検討した大西克禮)の鍵言葉にも無頓着な事実を指摘したうえで、「風土」に和辻が原語で明記する climat でなく和辻の定義に沿った milieu を「風土性」には milieu では落ち着かないため、あえて造語の médiance をあてた理由を論じている。フォン・ヘルクの提案を受けた国際研究集会として、Actes du colloque de Cerisy : *Être vers la vie, Ontologie, biologie, éthique de L'existence humaine* de Edisu, *Études japonaises*, 40-41, Automne 2008-été 2009. に収められた。筆者の考えは、フツツ「La naissance de la médiance à l'état embryonnaire ou l'origine de l'écoumène entre utérus et foetus」pp.189-204 として展開した。

(28) 前掲『風土』二三—二四ページ、安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』別巻一、岩波書店、一九九二年、三九〇—三九三ページ

(29) 『和辻哲郎全集』別冊第一巻に収められた「国民性の考察」のノート(抄)(三八〇—三九二ページ)に、和辻のハイデガーとの対決の現場が生々しい形で残されている。なお、このあたりのさらに詳細な「地理哲学」的解析は、木岡伸夫『風土の論理——地理哲学への道』(ミネルヴァ書房、二〇〇一年)、第一部参照のこと。

(30) 安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』第七巻、岩波書店、一九八九年、二四四ページ。前掲『風土』(昭和四年初稿、昭和十八年改稿)一五〇—一六〇ページも参照のこと。いささか皮肉なことにも、こうした次第で、和辻は上海に上陸しても、時局柄、自由に散策になど出ることではなかった。勝部真長『和辻倫理学ノート』(東京選書)、東京書籍、一九七九年、四八ページ

(31) 前掲『和辻哲郎全集』第七巻、二五五ページ。坂部恵『和辻哲郎』(20世紀思想家文庫)、岩波書店、一九八六年)は類書を絶した独特の切り口を有する書物だが、和辻『風土』のこのあたりの個所を忌避するイデオロギー的な配慮が、かえって坂部の時代性を露呈させ、その論鋒をたわめている(一二四—一二六、一二六—一二三二ページ)。

(32) 「国民道德論構想メモ」「国民道德論草稿(抄)」は前掲『和辻哲郎全集』別巻一に収録されている。なおこうした和辻の議論に対する最も正面からの批判は、Naoki Sakai, "Return to the West/ Return to the East: Watsuji Tetsurō's

Anthropology and Discussions of Authenticity," *Translation and Subjectivity*, University of Minnesota Press, 1997, pp.72-116. 概して日本の和辻研究者の評価は低い論文だが、北米の日本研究に典型的な一つの姿勢を代弁する代表的論文として、その決して読みやすくはない突兀たる英語の文体が、北米でいかに受容されたかへの配慮が必要であることのみ、備忘録に注記しておきたい。

(33) 三木清さらに戸坂潤の和辻『風土』批判については、すでに多くの検討があるため、ここでは省く。

(34) 四方田犬彦『先生とわたし』新潮社、二〇〇七年（四方田犬彦『先生とわたし』〔新潮文庫〕、新潮社、二〇〇九年、一三三ページ）。なお『叡知的世界』は一九三八年になってロベルト・シンチンガーほかによって独訳された。「絶対矛盾の自己同一」をニコラス・クザースの独訳を援用して *die Einheit der Gegensätze* と訳したという証言は、ロベルト・シンチンガー「西田哲学の翻訳のことなど」（下村寅太郎編『西田幾多郎——同時代の記録』岩波書店、一九七一年）二二六ページ。

(35) 前掲『光の領国』一六六一―一七〇ページ、および三章註十五。なお和辻は木村への反論「木村泰賢氏の批評に答う」（安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』第五巻、岩波書店、一九八九年、五六九―五八〇ページ）を欧州航路の南シナ海洋上で認めている。

(36) ここで蛇足を加えるならば、由良哲次の博士論文指導を担当したカッシーラーとパノフスキーの発想の温床となったのは、アビ・ヴァールブルクがハンブルクに設けた私設の図書館であり、その創設者ヴァールブルクの精神疾患の治療にあたったルートヴィヒ・ビンスヴァンガーがハイデガーに影響を受けて提唱したのが、精神医療の「現存在分析」にほかならない。

(37) 安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』第十三巻、岩波書店、一九九〇年、三三―三九ページ。ここでは前掲『光の領国』二二八―二三一ページの簡潔な整理を参照した。なお国家を形成する韌帯と国民性の問題は、和辻が隆盛を見せたいマルクス主義との対決として展開した議論だった。「間柄」をめぐる哲学的あるいは政治学的な考察からは、和辻がマルクスを批判しながらそこから養分を吸収した様が看取される。一九二八年にマルクス『エンゲルス全集』の日本語訳出版が開始されたという同時代性が色濃く影を落とすとともに、この年がまた昭和天皇の即位儀礼の年でもあり、臣民と天皇との「間柄」が新たな考察を要請していた時代性も見逃せない。事実、和辻もベルリンで付き合

いがあった鹿子木員信らは、紀平正美（一八七四―一九四九）らとともに、日本主義哲学を声高に喧伝していく。こうした潮流には、注（20）に触れた、鼓常良らも巻き込まれていく。鼓の『日本芸術様式の研究』（章華社、一九三三年）と和辻の『風土』（一九三五年）とは、留学帰りの成果として比較するに値するだろう。

(38) 前掲『風土』一四三ページ、安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』第八巻、岩波書店、一九八九年、一一二ページ

(39) 『国民道德論』は岩波書店編『岩波講座教育科学』第七冊（岩波書店、一九三二年）所収。一部は『風土』第三章二節「日本」の「台風の性格」と重複する。本稿は関連する「普遍的道徳と国民的道徳」ほかとともに安倍能成ほか編『和辻哲郎全集』第二十三巻（岩波書店、一九九一年）に収められている。引用箇所は、同書一六六―六七ページ

(40) 井上章一『法隆寺への精神史』弘文堂、一九九四年、一八六―一八七、二二―二二二ページ

(41) 和辻哲郎『和辻哲郎全集』第十八巻（自叙伝の試み）、岩波書店、一九六三年（単行本初版は一九六一年）。斑鳩に関する記述は、六〇ページ、鶴林寺の太子堂に関する記述は二二二ページ。

(42) 和辻哲郎『古寺巡礼』（岩波文庫）、岩波書店、一九七九年、「改版序」五ページ、一五、二三五―二四七ページ。なお初版本の現代表記による復刊は『初版古寺巡礼』（ちくま学芸文庫）、筑摩書房、二〇一二年、衣笠正晃解説）で入手可能。

(43) 和辻哲郎『古寺巡礼』岩波書店、一九一九年、三一七ページ。井上章一は前掲『法隆寺への精神史』二二二ページは、この一節に和辻が『風土』で展開する説とは相容れない様相を認めようとする。

(44) 和辻哲郎『妻和辻照への手紙』（講談社学術文庫）、講談社、一九七七年、二二〇ページ。琳派との比較を云々する観察そのものが、矢代幸雄の受け売りである。さらにこの箇所は和辻哲郎『イタリア古寺巡礼』（岩波文庫）、岩波書店、一九九一年）二二―二二九ページに書き直して利用される。フィレンツェの最後となるこの部分の末尾に、手紙でも『巡礼』でも「例の行儀の良い笠松」が登場しているが、これは和辻の「風土性」の直観を示しており示唆的である。

(45) ここでは、細部に兆候を見いだす傾向を因果律の枠組みのなかでの「兆候学」として要約したカルロ・ギンズブルクの論に依拠したが、ヴァールブルクが意図した「症候学」は相互依存の多重決定に身を委ねるものであり、両者は区別する必要がある、との反論を、ディディューベルマンが展開している。このあたりに関する精緻な議論として

は、田中純「イメージの自然史——天使から貝殻まで」(羽鳥書店、二〇一〇年)一六六—一七〇ページ。ここでは慧眼にも、矢代幸雄とヴァールブルク両者のポッティチェルリ論を対比して論じている。

(46) 出隆『出隆著作集』第七卷(出隆自伝)、勁草書房、一九六三年、和田博文／真銅正宏／西村将洋／宮内淳子／和田桂子「言語都市・ベルリン——一八六一—一九四五」藤原書店、二〇〇六年、二六三ページに引用あり。

(47) 前掲『風土』(岩波文庫)、七六ページ。日本の欧州旅行者の手記の多くに「雑草の不在」が観察されていることを出発点として、和辻の『風土』の可能性を問い直す注目すべき未刊行の論考、Denniza Gabrakova, "Meiji Critique and the Poetics of 'Homecoming in Modern Japan'"を著者から惠投頂いた。記して謝意を表する。

(48) 前掲『風土』九二ページ。

(49) 一九三六年、横光利一と同船で欧州航路に臨む高浜虚子は、シンガポールで南洋での季語の問題に直面し、パリではハイカイを実践するフランス人詩人たちが季語に一向に関心を示そうとしないことに苛立ちを隠さない。ここには和辻が『風土』で問題にした風土性の違いが、俳句という文学創作の場で露呈した実例を見られることも許されるだろう。高浜虚子『渡仏日記』改造社、一九三六年。その分析として芳賀徹「高浜虚子のフランス吟行」(『芸術の国日本——画文交響』角川学芸出版、二〇一〇年)三五五—三九六ページ。またその概要として児島由理「高浜虚子と横光利一の船旅——『渡仏日記』と『欧洲紀行』」(『実践女子大学紀要』第三十号、実践女子短期大学、二〇〇九年)六九—八二ページも参照。なお私家版だが、中川成美に『異国の情景——海外に渡った作家たち』(非売品、一九九五年)がある。

その虚子に対して、横光は次のような感慨を述べている。「印度洋で、高濱虚子氏は、印度洋月は東に日は西にといふ句をつくられたが、この句ほど下手な句はないにも拘わらず、この幼稚な平凡さに落ち込んだ所に、名手であれば落ち込み難い、外国といふ越へゆくべからざる穴がある」(『渡仏日記』一三六—一三七ページ)。この指摘を基礎に、前掲『渡仏日記』と横光利一『欧洲紀行』(創元社、一九三七年)に見える句作の季語を交えた表現の有効性が旅程でいかに増減するかを分析するという課題は、別の機会に譲らなければならない。

(50) 自らは写真機を旅先に持ち込むことはしなかった和辻だが、その既製品の写真絵葉書の活用には、フォトジャーナリズムの勃興期との一致を指摘しておいていいだろう。和辻の『風土』での砂漠の乾燥地帯を挟んだ東西文明の並行

進化をより生態学的な装いで描き出したのが、「文明の生態史観」(初出の「中央公論」掲載は一九五七年二月号、中央公論社)の著者梅棹忠夫(一九二〇—二〇一〇)だが、彼は、和辻の三十歳年下となる。三高山岳部から京大探検部へと進んだ梅棹は、フィールドでの写真撮影に才能を発揮したが、その写真を掲載した『アフガニスタンの旅』や『タイ』『インドネシアの旅』は岩波写真文庫から刊行される(岩波書店、一九五六年・五八年)。「文明の生態史観」はこの体験に裏打ちされているが、岩波写真文庫の編集担当は、一九三〇年代にベルリンに本社をもつBerliner Illustriert Zeitungのルポルタージュ報道員として雇用され、日本にフォトジャーナリズムを根付けた名取洋之助(一九一〇—六二)だった。

こうした次世代のジャーナリストや文化人類学者と対比してみると、文献学者・和辻の姿勢が鮮明となる。対象地域の住人たちとは密接な「間柄」にはならない距離を保ち、日本人共同体の枠組みという安全圏から外界を観察し、写真絵葉書という既製品を手段に文化の「風土性」を分析し、同行の洋行者たちには納得がいく、安心感を与える観察を闊達に提起する和辻哲郎——。そこに、フィールドワークを自らに禁じ、emic(内部観察)ともetic(外部基準による記述)とも無縁な定期航路の船内から世界を見る、観光人類学者の姿を認めることも許されるだろう。

〔付記〕本稿は二〇一一年に脱稿した。なお、校正時に笠原賢介「和辻哲郎『風土』とヘルダー」「思想」第千百五号(岩波書店、二〇一六年、一三六—一五七ページ)に接した。

〔編著者略歴〕

橋本順光（はしもと・よりみつ）

大阪大学大学院文学研究科准教授

専攻は英文学、比較文学

編著に『英国黄禍論史資料集成』全4巻（エディション・シナプス）、共著に『国際日本学入門』（成文社）など

鈴木禎宏（すずき・さだひろ）

お茶の水女子大学基幹研究院准教授

専攻は比較日本文化論、生活造形論

著書に『バーナード・リーチの生涯と芸術』（ミネルヴァ書房）など

おうしゅうこうろ ぶん か し
欧州航路の文化誌

寄港地を読み解く

発行———2017年1月27日 第1刷

定価———2000円＋税

編著者———橋本順光／鈴木禎宏

発行者———矢野恵二

発行所———株式会社青弓社

〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-3-4

電話 03-3265-8548（代）

<http://www.seikyusha.co.jp>

印刷所———三松堂

製本所———三松堂

©2017

ISBN978-4-7872-2069-1 C0021

〔著者略歴〕

西原大輔（にしはら・だいすけ）

広島大学大学院教育学研究科教授

専攻は比較文学、日本文学

著書に『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』（中央公論新社）、『橋本閑雪』（ミネルヴァ書房）、『日本名詩選1・2・3』（笠間書院）、詩集に『七五小曲集』『掌の詩集』『詩物語』（いずれも七月堂）など

大東和重（おおひがし・かずしげ）

関西学院大学法学部教授

専攻は日中比較文学、台湾文学

著書に『文学の誕生』（講談社）、『郁達夫と大正文学』（東京大学出版会）、『台南文学』（関西学院大学出版会）、共訳書に黄錦樹『夢と豚と黎明』（人文書院）など

山中由里子（やまなか・ゆりこ）

国立民族学博物館准教授

専攻は比較文学比較文化

著書に『アレクサンドロス変相』（名古屋大学出版会）、編著に『〈驚異〉の文化史』（名古屋大学出版会）、共編著に*The Arabian Nights and Orientalism* (I.B. Tauris) など

児島由理（こじま・ゆり）

立教大学・大東文化大学非常勤講師

専攻は日独仏文化交流史

論文に「森鷗外と19世紀ドイツの学問観」（『鷗外』第68号）、「クルト・トッホルスキーの「文化」批判」（『比較文学』第46巻）、「高浜虚子と横光利一の船旅」（『実践女子短期大学紀要』第30号）など

稲賀繁美（いなが・しげみ）

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授（並任）

専攻は比較文学比較文化、文化交流史

著書に『接触造形論』『絵画の臨界』『絵画の東方』『絵画の黄昏』、編著に『異文化理解の倫理にむけて』（いずれも名古屋大学出版会）、訳書にビエール・ブルデュー『話すということ』（藤原書店）など